
学園戦争～～ゲームとリアルは違います！

治田 神裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園戦争くくゲームとリアルは違います！

【Nコード】

N2190K

【作者名】

治田 神裕

【あらすじ】

俺月見里 亮は新学期そうそう学級委員にされてしまった。こんな俺のキャラじゃねえと嘆きながら迎えた学級委員会議通称級会での生徒会長の一言が俺の学園生活を激変させた。明日から君達に戦争してもらいます

新学期は戦争から（前書き）

まあ　なんとなく書いた学園ファンタジー物ですいろいろ未熟なところもありますがよろしくお願いします。

新学期は戦争から

「では、学級委員は、月見里 亮君で いいですか？」

「異義なーし！」んっ誰か俺の名前呼んだか？

「では次は体育委員を決めます。」何だ気のせいかって いつの間
に？まあいいどこまで決まったんだ？ 学級委員 月見里

……？ つっ！ なにーどういうことだ 将！「あー俺が推薦した。
」

ばっなに勝手にやってやがる今すぐ訂正しろ！！

「無理無理みんな賛成したしな諦めろ。」そう言って同情した眼差
しを向けてくる

ふざけるな！同情するくらいなら推薦すんじゃねー

……俺の声が虚しく教室に響いた。

俺の名前は月見里 亮よく間違えられるがつきみさとはなく俺の
名字はやまなしだ やまなしりょうそれが俺の名前だ。

運動はすこし得意勉強はまあまあ普通の高校生だと思ってる。しか
しそんな俺に最近一つの肩書が加わった、それは学級委員だ。学
級委員Ⅱ真面目なやつ そんなイメージがつきまとうだろう。

しかしこの俺月見里 亮 に普通なやつ 目立たないやつ な
んてイメージはあっても真面目で優秀といったイメージはまったく
もってついたことがないそんな肩書を押し付けられ俺の新学期は最
悪のスタートとなった。

新学期は戦争から（後書き）

読んでくださりありがとうございます。

これからもいろいろ書こうと思うのでよろしければそちらもよろしく願います。

会議にて（前書き）

続きです。あらすじ補完したかんじです。よろしければお読みくだ
さい。

会議にて

あーだるいまさか会議室に入るなんて思ってたしなー。てか会議室ってどこだっけ？まっ適当に誰かについていきや着くだろ。そう思った俺は隣のクラスの委員のあとを追った

「おーここが会議室か」 会議室は四階にあった。入学して1年自慢じゃないが移動教室以外ともに校内を歩いたことがない。この階にも初めて来たあーだりいさっさと入ろう。

会議室の中にはもう委員がほぼ全員揃ってた。

「あーすいません。遅くなりました。」 適当に謝罪して空いてる席に座る。俺がきてすぐ全員が揃った。するといかにも勉強できます。といった顔をしたやつが立ち上がった「えー生徒副会長の坂井です。会議の議事進行を勤めさせて貰います。」

おーこの人が副会長らしい。……初めて見た。

「それではまず始めに生徒会長から重大発表があります。それでは会長、よろしく願います」 重大発表ねえテレビじゃあるまいしどうせくだらないことだろ。そう思いながら前に視線を戻すとうわっ これまたいかにもな奴だよ 眼鏡を掛けてやがる。

「生徒会長の玉木です。先程言われたように重大発表があります。」とここで一端言葉を切って全員を見渡した。

勿体振らないでさっさと見えよ そう思った俺だったが会長の校内に残る歴史的発言を聞いてそんな思いも吹っ飛んだ。

「明日から君達に戦争をしてもらいます。」

空気が凍った。皆これって冗談？という顔をしている。俺もさっきまでの気分はどこへいったのかすっかり動揺していた。

そこへ会長が畳み掛けるように続けて言った。

「今から

君達には詳しく説明しよう。この学園の秘密も含めてね。
「
そう言うと会長は不敵な笑みを浮かべた。

会議にて（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

まだまだ続くのでよろしければおつきあいください。

学園の秘密（前書き）

ついに物語は主題にはいりましたよければご覧ください。

学園の秘密

会長の発言は皆を混乱させたが10分ほどかかってようやく落ちていた。

「まず最初から話していこうかな。」

そう言って会長は話し始めた。

「この学園には秘密がある。それは信じられないかも知れないが事実だ。そして その秘密は、世界の運命が関わっているかも知れない。」

そこまで話すと会長は一息いれた。そして一気に話し始めた

「この学園には代々の生徒会がソフトと呼んでいるところが無数にある。そこへいくと、ある特定のキーワードを念じることによってハードと呼ぶ世界に行くことが出来る簡単に言えば異世界だ。そこはゲームにでてくるようなファンタジー世界でモンスターすら存在する。始めに発見されたのは、この学園創設時今から5年前だ。初め見つけたいや迷いこんだ生徒は元の世界に帰ると教師に報告しようとしたしかしできなかったんだ。なぜならそれがルールだったからだ。結局その生徒は当時の生徒会に報告したその報告を聞いた生徒会は調査を始めた。そしてついに前生徒会がこれを発見した。」

そう言って生徒会長が写真を配り始めた。

俺も一枚受けとる。

「なんだこりゃ。」

そこには石版が写っていた。それにはなにか文字が刻んであった。

「そしてその石版に刻んである内容はこれだ。」そう言って会長がA4用紙を配ってきた。そこには要約するところ書いてあった。

ルール1 このゲームは朝9時（1時限）から夕方5時（7時限）まで

ルール2 このゲーム（世界）での怪我は現実では治る。

ルール3 この世界のことは口外不能（学園の学生のみと話せる）

ルール4 学業不振の生徒は参加不可能

ルール5 このことは卒業と同時に忘れる。

ルール6 この 界 は ほろ る

の6つのようだ。しかしまあ新学期早々学級委員にされたと思ったら異世界ときたもんだ。俺が驚き半分呆れ半分でいると会長が再び話し始めた。

「そこに書いてある通りだルール6は削られていて読めなかったが世界と滅ぶ この二つは分かったそこで調査を続けた結果どうやらこのゲームをクリアしなければならぬらしい。そのタイムリミットは1年だ、そこで各委員に調査に協力して貰いたい。ああ言うておくが強制ではない、そしてあちらで流れる時間はこちらより遙かにおそい一週間でこちらの1時間といったところだ。以上何か質問はあるかな■」

しばらく誰も手を挙げなかった。当然だ今のを一発で信じるようなやつは精神科に行くことを勧めるぜ。しかし沈黙が痛いしさつさと終わらせたかったので質問した。

「それを信じるとして協力するならどうすればいいんですか？」

それに会長が嬉しそうに答えた。

「ああ 忘れていたね協力してくれる人は明日昼休みに会議室に来て欲しい。まあなんにせよ考える時間が要るだろう。今日はこれにて終了なおこのことは、他言無用とする。では解散！」

こうして俺の生活は激変した。

学園の秘密（後書き）

読んでいただきありがとうございます。一日おきに更新しようと思います

異世界へ（前書き）

ついに舞台は異世界へこれから話はどんどん進みます。よければ読んでいってください。

未熟なところもありますがご了承ください。

異世界へ

全く信じられねえ　これが昨日の出来事にたいする俺の感想だ。
だいたいいきなり異世界なんて言われて信じられるかつーの、し
かし俺はおもしろくなってきたと思った。何故なら　ゲーム　会長
はそう言ったしかもファンタジー世界だと！正直嘘臭いがまじなら
おもしろえ。　やってやろうじゃねえか数々のゲームをクリアして
きた俺を相手にゲームとはF○やドラ○エ
くらいおもしろいといいけどな。

昼休みになると早速会議室に向かった。　しかしまあ思ったより人
がいる

「昨日の半分くらいはきてるな。」

しかしまあうちの学園はよっぽど暇な奴が多いみたいだな。まあ来
てる俺が言えたことではないがそれでもあの話を信じた奴がいた
ほうが不思議だ　物好きなやつが多いのか会長が信頼されてるのか
判らんね。

「諸君よく来てくれた。正直数人くればいいほうと思っていたので
嬉しい誤算だ。では早速で悪いがついて来てくれ。」

そう言うとか会長は歩きだした。　もちろん俺達も後に続く、なんか
異様な光景だな会長の後を何人も真剣な顔して歩いていくのは、ま
っその中の俺も周りからは、そう見えるんだらうけどな。

会長についていった先は北校舎だった。　こんな人気のないところ
でどうする気だ？

疑問に思っていると他の奴が聞いてくれた。

しかし会長は、それにはすぐには答えず消火ホースの側で何かしている。なんだってんだいったい 「今から諸君にはソフトからハードに飛んで貰う何、することは簡単だ ゲームスタートと言うもしくは念じればいい。それだけでハードに行くことができる。では私は一足先に行って待っているよ。」

そう言って会長は消火ホースに手をかざした、と思ったら次の瞬間には消えていた。周りから

「嘘っマジ!」といった声があがる。

俺はゾクゾクしてきた会長の話しはマジだったのか!

「面白い! 楽しくなってきたゲームスタート!」

この瞬間俺の心は期待でいっぱいだった。

異世界へ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。これからもよろしく願います。

モンスター始めはやっぱりスライムでしょ。(前書き)

異世界偏ついに始まりました。これからゲーム色が強くなりますが、
よければお読み下さい。

モンスター始めはやっぱりスライムでしょ。

叫んだ瞬間俺は異世界に来ていた。少し離れたところに会長がいたのでとりあえず、側に行っておくその間にも続々と他の奴らもやってくるが、俺はそんなことはもう眼中になかった。

「スゲェ！これが異世界か妄想が現実になったみてえだ。」

俺は叫んでいた。それほどの出来ごとだ、つい先日まで学級委員なんてありえねえと思っていたのが嘘みたいだった。

「しかしここはどこなんだ？」

周りは見渡す限りの草原だった。いやよく見ると東に街らしきものが見えた。そうやって物思いにふけていると、会長の声がした。

「さて 全員揃ったかな。では早速この世界について話しておこう。まずこの世界には人が住んでおり 西洋風の街が無数にあることが分かっている。ただ日本語は通じるので安心して欲しいただし我々が異世界から来たことは言わないように。次にこの世界はローファシアといい国王 レイス ウォード アルレシア によって統治されている。これくらいは覚えておくように、あと日本名だと怪しまれるので適当な偽名を名乗るように最後にこの世界から帰るときは、ログアウトと念じればいい、ただし現地の人に見られないように。以上なにか質問は？」

生徒A「モンスターに会った場合は？」

てっもう普通に質問してやがるもう驚いたりしないんだな。

「武器も何もないからな基本逃げてくれ。この世界では身体能力がいつもの2〜3倍に なっている筈だ確認してくれ。」

言われた通り跳んでみた自分の身長くらい跳べたナニコレチート？

「質問がないなら以上だ　とりあえずこの世界に慣れてくれ　好きな時に戻っていい　詳しいことは、放課後話す。では解散！」
そう言ってこの場は解散となった。

こうなればこっちのものよ、まずはRPGの基本街で情報収集だ！
という訳で早速走って東に見えた街に向かう。走りだして分かった身体能力が半端じゃない。ゲームの主人公はこんな気分なのかと、車並の速さで走りながら考える。じわじわとテンションが上がってきた。　とそこで茶色の物体を見つけた。

「ん？あれは…」狼だったしかしデカイ。2メートルくらいある、たしかゲームで見たような…　まあいいまず街に行こうと、よそ見しながら考えていると何かを蹴っていた「ん？何だ？」立ち止まってみると青いプニョプニョした生きものがいた。

「スライムだ！」たまらず俺は叫んでいた。この世界には驚ろかされてばかりだ。スゲード○クエ　か？やっぱり基本最初はスライムなんだ。　変なところで納得しているとスライムがポンツと音を立てて消えていた。硬貨が二枚落ちている。走ってる途中に踏んだだけだが倒してしまったらしい。

「最高だなこの世界は」

それは今の俺の偽りのない気持ちだった。

モンスター始めはやっぱりスライムでしょ。 (後書き)

読んでいただきありがとうございます。 まあなんとかここまでできました。 これからもよろしくおつきあいください。

次回 街についた亮はさっそく酒場に入り食事をするそこでたものはスライムの踊り食い！ (冗談です。)

酒場にて（前書き）

ここまでくるのに丸一日かなり苦勞しました。
読みずらいところもありますがよろしくおつきあいください。

酒場にて

おばさんから酒場の場所を聞き出した俺は早速街の中心に向かった。しかしその途中がまさにファンタジー世界！

魔法書が売ってあったり

剣や盾など武器や防具が並べてあったりまさしく異世界だった。

キョロキョロと周りを見ながら進むと広場に出た

どうやら街の中心らしい さて 酒場はどこかなって おっ あそ

こか 樽からビールが溢れた絵が描かれている。 ……なんかこの

店西武劇の世界みたいだな。

キイツ 「いらっしやい」扉を開けるとむっとした熱気が押し寄せてきた。

酒場は昼だというのに混んでいた。テーブルではいろんな男達が酒を飲んでおり極少数女もいた。

俺はさっさとマスターのところに向かった。

「失礼、マスターちょっとよろしいか？」

俺はなるべくそれっぽく聞いた。しかしマスターの反応は意外なものだった。

「ゴールドカフスカ 何か用か？」

気付いたが酒場の連中は皆俺を見ていた。

「失礼 ゴールドカフスとはなんだ？」

何のことか聞いてみた。

「知らないのか？ あんたのような金ボタンの服を着た連中のことさ、こないだも大男をのしてくれたぜ。」

そう言ってマスターは笑った。

ゴールドカフスなる連中は十中八九生徒会だろう 既にこちらでは知られているらしい。

「まあいい マスター何か適当なクエストはないか？」

俺は駄目もとで聞いてみた。

すると意外にもあっさり教えてくれた。ゴールドカフス効果か。

ワーウルフ討伐指令を受け武器を借りて近くの ラシアの森に向かった。

酒場にて（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

毎日更新しようと思います。

遭遇そして戦争へ(前書き)

ついにタイトルの学園戦争にたどりつきました。

よろしければ読んで下さい。

では学園戦争〜ゲームとリアルは違います！をどうぞ

遭遇そして戦争へ

酒場のマスターからクエストを受けた俺は適当な剣を借りてワーウルフの討伐に向かった。

「ゲームのようにはいかねえか。」

森に着いてそうそう俺はぼやいていた。

ゲームじゃ感じないがこの世界にも蚊がいるんだな。それに歩くと
びに蜘蛛の巣が顔にかかる。

「ちっ　森でのクエストなんて受けるんじゃないかったな。」

しかし今頃後悔しても遅い。俺は気分を切り替えて、さっさとかた
ずけることにした。

森を歩くこと20分

辺りはすっかり暗くなり嫌な雰囲気になってきた

「そろそろ出る頃だな」

辺りが開けた所で俺は剣を握り直してワーウルフの出現をまった。

「ガサガサ」

「来たか！」

俺は音のしたほうに体を向け音の正体が出てくるのを待った。

すると反対からワーウルフが飛び出して来た。

「つつ！」

不意を突かれたが、身体能力の上がつている今の俺の反応は速かった。

「甘いんだよっ」

俺は相手の爪を避けながらおもいきりワーウルフの腹を斬ってやった。しかし流石ワーウルフそれだけでは死なず、再び襲い掛かってきた。

「ちっ さすがしぶとい」

俺は舌うちしつつも反撃しようと剣を構えた。

瞬間！

「ひゅんっ」

どこからか矢が飛来しワーウルフの首を撃ち抜いた。

「つつ 誰だ！」

俺はとっさに伏せつつ周りを見た。

するといつの間にかブレザーを着た野郎がいた。

「ブレザー！？」

俺は困惑した。俺の高校の制服は学生服 ブレザーではない。

「何者だ！」

俺は警戒しつつ尋ねた。

しかし相手の反応は、俺の予想を超えていた。

「東輝高校 二年 葛西 彰 西林学園だな？」

「東輝高校だと！」

俺は驚いた。他校の生徒がいたことにも驚いたが相手がこちらを知っていることのほうが衝撃てきだった。

「ちようどいい 生徒会長に伝えて貰おうか！」

開戦は午後4時場所は風の丘だ。では、確かに伝えたぞ。」

そう言い残すと葛西は去っていった。

俺はとっさに生徒会長の言葉を思い出していた。

「明日から君達に戦争をして貰います。」

あれはマジだったのか！ いや この世界があった時点でもさかとは思っていたが。

会長に報告しないとな

「ログアウト」

これが学園戦争の始まりだった。

遭遇そして戦争へ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。よろしければ次話もご覧下さい。

ついに戦いへ(前書き)

さあ話が本場に入りました。一気に話が進みます。

読みづらいかもしれませんがご了承ください。

ついに戦いへ

気付くと俺は北校舎に戻っていた。

周りに数人いたので尋ねておく。

「なあ 生徒会長はどこ分かるか？」

「ああ 生徒会長なら会議室らしいぞ。」

誰かが答える。

「サンキュー」

俺は礼を言って会議室に向かった。

「会長！」

俺は会議室の扉を開けるなり叫んでいた。

「何かね。」

会長は憎たらしいくらい落ち着いていた。

それで俺も冷静さを取り戻し森での出来事を報告した。

「ふむ。」

会長はそれを聞いたあとしばらく、何か考えていたようだが、思
いだしたようにこちらを見ると

「ご苦勞だったね、その件についてはこちらで対処しよう。報告感
謝するよ。」

そう言って、また何か考え始めたので、長居は無用と判断し、亮は
会議室を出た。

会議室をでた後すぐに、チャイムが鳴ったので、詳しいことは放
課後聞くことにした。

「さて、きっちり答えて貰うかな。」

俺はホームルームが終わると真っ先に会議室に向かった。

すると、案の定会長がいた。俺はすぐにでも尋ねたかったが、全
員揃うまで待つことにした。

5分もすると皆集まった皆、よほど気になってるみたいだな。

「諸君、よく集まってくれた、しかし本題に入る前に言ってお
く、これから話すことは、学園の運命に関わる。覚悟ができない
者は、今すぐここを出て欲しい。」

そう言って会長は皆を見たが出ていく奴はいなかった。

「よろしい、では本題に入ろう。今から君達には昨日言った通り、

戦争をして貰う。」

驚きの声はあがらなかった。流石皆予想していたらしい。

「皆分かっていたようだね。それなら話は早い、今すぐ君達には、東輝高校と戦争をして貰う。

詳しいことはハードに移動してから話す。今すぐ移動してくれたまえ。」

そう言うと会長は、昨日と同じ笑みを浮かべた。

そしてこれが学園戦争の始まりとなった。

ついに戦いへ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。またよろしければお読みください。

戦争開始（前書き）

学生同士の戦争開始です
例によってよろしければお読みください。

戦争開始

あのあと、ハードに移動した俺達は、会長の説明を聞くことになった。

「ではまず、何故東輝高校と戦争しなければならないのかを説明しよう。それは、それが向こうのゲームクリア条件だからだ。」

長くなるので簡単にまとめると、東輝高校もうちと同じ秘密つまりソフトとハードがあり。

同じような経緯でルールを知った。

しかしルール6がうち、つまり西林学園を倒すことらしい。当然こちらも黙ってやられる訳にもいかず、戦争と言う形で決着を付けることとなった

とまあ、よくこんな非常識なことで戦争するかねえ、と思ったがやるというなら仕方ない やってやろうじゃねえか。

「しかし学生同士でもあるし、なにより話が広まればパニックになる。」

そこで互いに30人代表を出し小数で決着をつけることになった。さて、確か今この場には36人居た筈だ。この中から女子は抜けてくれたまえ それでちょうど30人になる筈だ。」

集団の中から、女子が抜け始める。

しかし、女子居たんだ。戦争とか聞いて来るとはねえ。

女子が抜けたのを確認して会長が話し始める。

「よし。これで30人になった筈だ。では勝利条件と、作戦について話しておこう。

まず勝利条件だが、これは相手の生徒会長の腕章を奪うことだ。これは多少乱暴にしても構わない 次に作戦についてだが、

これは至ってシンプルだ

まず、私の護衛に十人残り残りで相手の生徒会長を倒しに行く。

以上だ。何か質問は？」

誰も反対はしなかった。

「よし、生徒会役員と、あと4名残ってくれ、あとは相手の生徒会長の腕章を奪うのが任務だ。ではいくぞ ミッションスタート！」

こうして戦争は始まった

戦争開始（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。
よろしければ次話もまたお読み下さい。

戦闘開始（前書き）

話が暗くなり始めます。
まあ暇潰しにどうぞ。

戦闘開始

会長の声と同時に草原の端にブレザーを着た集団が現れた。

「東輝高校……」

誰かがつぶやいた。

今から戦争開始だ。

俺は興奮を抑えられなかった。

「いくぞ、絶対負けるな！」

会長の号令に皆が答える

「ウオオオオオ！」

それに対抗するように向こうからも声が上がった

いよいよ戦闘開始だ。

どちらも同時に走り出した。しかし分かっていたが速い。超人
対超人のバトルである。

互いに宙を舞い、相手をおかしながら互いの生徒会長に殺到する。

俺も相手に向かった。それに相手が飛び付いて止めにくる。

始めは一对一で、相手を押さえるだけだったが、

次第に荒れてきて 相手を殴って気絶させたりするようになり。しまいには 乱闘になった。

それが丸一日続き、もはやルールも秩序もお互い無くなっていた。打撲は当たり前で骨折といった。怪我が目立ち始め。ついに会長が

「全員退却！」

と叫んだところで戦いは終わった。

俺も指の骨が折れており、すぐにログアウトと唱えた。

元の世界に戻るとルール通り怪我は直っていた。しかし戦っていた余韻が、まだ残っており、すぐには落ちつけそうになかった。

しばらくすると会長が戻ってきた。

みんなが注目する中、会長は呼吸を整えていたが、皆を見渡すと、意を決したように話し始めた。

「明後日再び戦うことになった。ただし今度は武器の使用を認め、人数制限も無しとなった。

よってこのことを全学園の生徒に話そうと思う。

皆、各クラス委員は皆への説明を頼みます。

……次は血をみることになるだろう。」

こうして、学園全生徒の参加する、東輝高校との全面对決が、始まることとなった。

……それが罨だとも知らずに。

戦闘開始（後書き）

ありがとうございました。次はもっと長くかきます。

秘密は広がり（前書き）

戦争前の話です。亮の推察が冴えます。

それでは、学園戦争くゲームとリアルは違います！どうぞっ

秘密は広がり

会長の宣言を受け各クラス委員は、一般の生徒にも学園の秘密と告げた。

始めは、大半の生徒が冗談だと思っていたが、話をしてきたのが委員だったことと、生徒会が実際に、ソフトからハードにとばせたことで、二日もしない内に全学園生徒の知るところとなった。

「しかしまあ、会長も思いきったことをする。」

俺は半ば呆れていた。

あれほど秘密にしたいと言いながら、一転して話を広め始めたのだから無理ない。

「しかし確かに、戦争に勝つには、これしかないだろうな。」

一方で俺は納得もしていた。

「人数制限はない。」

会長は、そう言った。数は力だ、そしてそれは子供でも分かることだ。

「なら、やっぱり会長は、戦うつもりだな。」

そして、勝つつもりだろう。それは、今回噂が広がることによる、パニックの発生を、無視したことから分かる。

「まあ、あれは酷かったしな。」

先日の戦いを思いだす。

あれは、最初スポーツのような感じだったが最後はルールも何もなかった。会長はおそらく、それを避けたいが為に、圧倒的な人数差で、勝利を収めたいのだろう。

しかし俺は今の状態を疑問視していた。

「この状況、何かの思う壺のような気がしてならない……」

そう。俺はこれは、このゲームを仕掛けてきた何物かの、罠のような気がしてならない。

「クリア条件が矛盾している。」

明らかに内と東輝高校の対立を煽る条件だ。

「まさか、このゲームには、第三者が居る？」

有り得る話だった。

「しかし、そうになると、仮に第三者が居るとして、そいつは何の得があるんだ？」

そこだけが疑問だった。

そして、そこだけが分からない。

しかしそんな亮を置いて事態は進んでいった。

ゲームに参加して三日目、遂に、血を見ることになりそうだった。

秘密は広がり（後書き）

今回も読んでいただきありがとうございます。

次話は、今日中に更新したいと思います。

生徒会長の演説（前書き）

ほとんど生徒会長の演説になってます。

まあ、いろいろありますが、よろしければお読みください。

それでは、学園戦争〜ゲームとリアルは違います！どうぞっ

生徒会長の演説

亮が 第三者の存在を危惧する中。
遂に、会長による全生徒への説明と、演説がおこなわれた。

「全学園生徒諸君、生徒会長の玉木です。
今から諸君には大事な話がある。どうか最後まで聞いて欲しい。」
そう言って、会長は、一旦話を切り、皆が落ち着くのを待った。

「諸君は各クラス委員から話は聞いた筈だが、まだそれが本当か、疑っている者もいると思う、が しかし残念なことに事実だ。」

……会長は、本当に残念そうだった。

「ならば、諸君も知っている通り東輝高校と戦争をしなければなら
ない。

実は先日、我々だけで何とかしようと、既に東輝高校と一戦行った。

……結果は、決着が着かず引き分けとなった。

……これについては、私の力不足によるものだ。戦ってくれた諸
君、済まないことをした。

この場を借りて謝罪させて貰う。

ただし、次は必ず勝つ、その為に、こうして皆に声をかけてもらっ
た。

したがって、次の戦いに引き分け、まして、敗北は存在しないこと
を約束する。

さて、具体的な話に移るが、まず生徒諸君には、ルールの説明をし

ように思う。一つは、人数制限はなしということ。何人でも参加できる。二つ目は勝利条件で、私の着けている腕章を奪うこと。こちらの場合は、相手の生徒会長になる。

……そして三つ目は、………武器の使用を許可し、殺さなければ、相手を銃で撃ったり、剣で斬っても構わない。というものだ。」

ここで皆が騒がしくなった。

「えっ！」 「嘘！」

という声が上がる。そりやそうだ。いくら何でも、学生同士という以前にこの国が、戦争を止めて六十年近くたつ。戦争とは、無縁だったのが命をとらないのが原則といえど、限度ってもんがある。

生徒会長の演説（後書き）

今回もお読みいただきありがとうございます。週末は、5話程更新しようと思います。暇潰しにでも読んで戴ければ幸いです。

交渉（前書き）

話しもかなり進んできました。そろそろRPG的な冒険が待
つていそうです。

それではっ 学園戦争くゲームとリアルは違います！ どうぞっ

交渉

放課後、会長の号令で全男子は、ハードに集合となったが、俺を含めた数人は、武器を集める為に、生徒会公認で授業を休み、一足先にハードに来ていた。

「さて、じゃあ一旦別れて、2時間後にここに集合で」

「了解！」

「じゃあっ 散っ！」

忍者みたいだなと、一瞬思ったが、この身体能力は忍者か、と思い直した

「さてまずは、この間の酒場に向かうかっ」

10分後、俺は酒場の前に立っていた。

「さてと、とりあえず、この間のワーウルフの報告をしないとな。」

酒場は、相変わらず熱気につつまれていた。

「マスター、俺を覚えているか？」

俺が尋ねると、マスターは、すぐに反応してくれた。

「おおっ 誰かと思えばこの間の兄ちゃんじゃねえか。 どうしたんだ。」

おおっどうやら覚えていてくれたようだ。

「いやっ この間のワーウルフ討伐クエストの件でちょっとな。」

「おおっ あれか、きっちり倒してあったと報告があったぞ、ほれ、報酬だ。受け取ってくれ。」

そう言って袋を放ってくる。 受け取ると中にはコインが入っているらしく思ったより重かった。

「どうも、マスター、それでだな、俺をギルドのメンバーとして登録させてくれないか。」

俺は礼を言うのと前から考えていたことを切り出した。

案の定マスターも驚いたようで、

「そりゃまたなんで？」

と聞いてくる。

「実は、な……」

俺は声を潜めると、簡単に事情を説明した。マスターは、始めは胡散臭そうに聞いていたが、話が進むにつれて興味が湧いたらしい。

話し終わっても唸っていたが、やがて、いくつか質問してきた。

「その、敵とやらは、あんたらみたいなやつらのことか？」

「ああっ」

「で、そいつらと戦争をすると」

「そうだ。」

「そのため武器と相手の情報が、欲しいと？」

「そうなるな」

俺は努めて冷静に返事をした。相手に不安を与えてはならない。

そうした。俺の態度を見て安心したのか、マスターは顔を上げて話しかけてきた。

「条件がある。」

俺は成功を確信した。

交渉（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます
次は夕方の更新になると思います。

これからよろしくお付き合いください。

ギルドの依頼（前書き）

いつの間にか十話を越えていました。

それでは どうぞっ

ギルドの依頼

あのとマスターが出した条件は、二つだった。

一つは、生徒会長に会わせること、

そして二つ目は、こちらの依頼を達成することだった。

まず、俺がOKしたのは、二つ目のほうだった。生徒会長に会わせるのは、そのあとでよいと感じたからだ。

そこで俺は早速依頼内容を聞いてみた。

「でっ 受けて欲しい依頼はなんなんだ？」

マスターは、少しためらったが、話し始めた。

「あんたに受けて欲しいのは、古城から一冊の魔導書を取ってくるという依頼さ、既に失敗したという報告が、山ほど入ってる、なんでもモンスターが出るだけでなく、罠や謎解きが多くて誰も成功してないそうさ。」

おおっ！それはウィードォイか！ まさしくRPGの王道だなっ！

……しかしそれにしても やけにゲーム臭いな…… やはり何か裏がありそうだな。 まあ今は、目の前の依頼に集中するか……

「分かった、マスターその依頼引き受けよう。」

俺が承諾するといきなりマスターは声を小さくして忠告してきた。

「ところでこの依頼、あんたの言っていた連中も受けてるみたいだ、……気をつけな」

そう言うマスターは、黙って依頼内容が詳しく書かれた紙を差し出した

「マスターその連中はなんと名乗っている？」

マスターは黙っていたがやがて小さい声でつぶやいた。

「イーストシャイン」

東の太陽で東輝か……

またストレートな名前を使う、もしかして罠か？

だが俺に選択肢は他になかった。

ギルドの依頼（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

仲間を（前書き）

ついに仲間が登場しそうです。あと更新が遅くてすいません。

仲間を

マスターとの交渉の結果俺は、古城から魔導書を取ってくることもなった

「しかしまあ、ありがちな話だな……」

ますますこの世界を疑問に思った亮だったが……

「まずはこの依頼か」

ひとまずマスターにまた来ることを告げて、亮は店を後にした。

「それで、私に来て欲しいと？」

あのあと古城について情報収集したあと、集合場所に戻って成果を確認して生徒会長に報告に来ていた。

今の生徒会長の質問は、マスターの要求を伝えたからだ。

「はいっ 率直に言えばそうなります」

「ふむっ……」

会長が考え込む、短い沈黙の後質問してきた。

「それで？そのギルドマスターは、どのくらい武器を用意すると？」

「はいっ、数は答えませんでした、受けるよう求めてきたクエストの報酬からすると、百本近くになるかと」

「ほうっ……」

会長は感心したかのようにだったが、俺が一番聞かれたくなく、気にしていることを聞いてきた。

「それで……そのギルドマスターは信用できるかね？」

「それは……」

俺は返事が詰まった。

それに畳み掛けるように会長が追い打ちをかけてくる。

「戦争の勝利条件である私が行くのだから、せめて安全だけは保証してくれないと困るよ」

会長が苦笑を向けてくる

しかし俺にも考えがあった。

「会長、そこで先に古城のクエストを受けたいのですが」

「構わんが……どうしてまた？」

驚いたように聞いてくる

「確かめたいことがありますので…… ところで会長、実は連れて行きたい奴がいるんですが……連れていってもいいですか？」

「構わんよ好きなだけ連れて行ってくれたまえ」

会長は快く承認してくれた。

「では、同じクラスの………」

仲間を（後書き）

次話は、長く書けるようにします。

パーティー編成（前書き）

遅くなりましたがお読み下さい。

パーティー編成

「では……同じクラスの 滝川雷輝と神谷翔太、あと木村隆弘をお願いします。」

俺はクラスメイトであると同時にネットゲ仲間の三人の名前を挙げた。この三人とは、幼なじみでもある。

……野郎三人か、華がないな。

「よろしい、ただし本人の意思を尊重するようにしてくれたまえ」

「わかりました」

俺は会長に敬礼をして会議室を出た。

………なんか戦争のノリになってきてるな………

☆

放課後俺は教室で三人と話していた。

「と、いう訳で来い拒否権はない」

雷「めっちゃくちゃだぞ亮」

隆弘「面白ろそうじゃねえか！」

翔太「だりーよ亮」

とまあ、この三人が仲間として俺が選んだ訳だが

雷輝が雷、隆弘が 隆

翔太は翔と略させて貰う

「行くぞ、古城クエストだ、ついてこい」

ぐずる三人を俺は連れてハードへと向かった。

「「「ウオオー！」」」

案の定三人は、まだハードに来たことがなかったらしく連れてくると、かなり興奮していた。

……オマエラさっきまでぐずってた癖に……

「おい やる気が出たならギルドに行くぞ」

俺は呆れつつも三人を連れて酒場へと向かった。

☆

「マスター、仲間を紹介する」

酒場に着いた俺は、三人をマスターに紹介していた。

「へーっ！まさに異世界だな」

「ゲームの中みてーだ」

「面白いな」

…全く話を聞いてない

「おいっ！お前ら、ちゃんと聞いてねえと、怪我するぞ」

注意するとやっとこっちを向いた。
やれやれ、先が思いやられるぜ。

「パーティーを編成していく、武器の希望などはマスターに伝えとけ、装備を整えて2時間後に出発する。あと、役割はいつも通りにいく。以上、何か質問は？」

気を取り直して、ネトゲの時のように俺が仕切る

「マスター、魔法書はあるか？」

「大盾と槍が欲しいんだが、あるか？」

「鎧と太剣、あるか？」

皆思い思いの武器を所望する。おっと、俺も揃えないと。

俺達は賑やかに装備を揃えた。

出発前に、役割を紹介しておこう。

雷輝……………後衛

翔太……………前衛

隆弘……………前衛

俺……………遊撃

以上、

パーティー編成（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2190k/>

学園戦争～～ゲームとリアルは違います！

2010年10月9日03時37分発行